

■（１１１）取材の心得は「罪を憎んで人を憎まず」

思わず、「罪を憎んで人を憎まず」ということわざを思い出した。孔子およびその一族に伝わる言行録集成の書にある。本来は年度末で定年退職する予定だった多くの先生が、急に決まった給与や退職金の減額前に仕事を辞めることになったという記事に触れた時のことだ。

記事は一見、「収入減への対策」か「教育者の意識」か、という選択の問題に読める。だが、本来はどちらかを選ぶような話ではない。条例で決まったとはいえ、なぜ、３学期の途中で先生が自らの身の振り方を決めなくてはならないのか、という点が鍵だろう。多くの報道が出た結果、「収入減」と「教室の混乱」をともに回避する善後策が各地で出始めた。

このような問題を取材する場合、社会的な背景まで探るよう、記者は努める。個人攻撃ではなく、世の中の構造的な欠陥が根底にあるのではないか。冒頭のことわざの「罪」を、常に「社会的な問題」に置き換えて考える。今回ならば、給与・退職金の変更時期に問題があるのではないかと。

年度末は入試の季節でもある。センター試験で国語の平均点が大幅に下落した。問題に使われた批評家の文章の難しさが原因なのか、若者の読解力低下のせいなのか。憎むべきは何か。（山）